

「アルバート氏の人生」★★★★

2 0 1 2（平成 2 4）年 1 1 月 2 8 日鑑賞<角川映画試写室>

監督：ロドリゴ・ガルシア
アルバート・ノップス（ホテルで働くウェ이터）／グレン・クローズ
ヒューバート・ペイジ（大男のペンキ屋）／ジャネット・マクティア
ヘレン・ドウズ（ホテルで働く若いメイド）／ミア・ワシコウスカ
ジョー・マキンス（ボイラー職人）／アーロン・ジョンソン
ホロラン医師（ホテルの常連客）／ブレンダン・グリーンソン
ヤレル子爵（ホテルの上客）／ジョナサン・リス・マイヤーズ
ベイカー夫人（ホテルの女主人）／ポーリーン・コリンズ
キャスリーン（ヒューバート・ペイジの妻）／プロナー・ギャラガー
ポーリー（ホテルの客、独り身の老女）／ブレンダ・フリッカー
2 0 1 1 年・アイルランド映画・1 1 3 分
配給／トランスフォーマー

<さて、これは一体何の映画？>

「アルバート氏」と言われても、私はアルバート氏と面識がないので「その人生」についてイメージすることはまったくできない。そこでチラシを見ると、本作は第 8 4 回アカデミー賞で主演女優賞、助演女優賞、メイクアップ賞の 3 部門にノミネートされたうえ、「構想 3 0 年、大女優グレン・クローズが女優人生をかけた映画が誕生！」とある。しかし私は、主演女優賞にノミネートされた大女優グレン・クローズも知らないし、助演女優賞にノミネートされたジャネット・マクティアも知らない。

しかも、チラシには「“彼女”が夢を叶えるには、“男性”として生きるしかなかった。」「本当の自分は、タキシードの下に隠して生きてきた・・・。」と書いてある。こりゃ一体ナニ？アルバート氏は男？それとも女？そして、本作は一体何の映画？

<1 9 世紀のアイルランドの階級社会とは？貧困とは？>

映画は冒頭から、モリソンズホテルのウェ이터として働く初老の男（？）アルバート・ノップス（グレン・クローズ）の几帳面な姿を映していく。ホテルの女主人ベイカー夫人（ポーリーン・コリンズ）はなじみのホロラン医師（ブレンダン・グリーンソン）やヤレル子爵（ジョナサン・リス・マイヤーズ）、そして独り身の老女ポーリー（ブレンダ・フリッカー）などの上客には愛想タツブリだが、アルバートたちホテルの従業員に対しては厳格そのもの。しかし、アルバートはベイカー夫人からもお客様からも信頼が厚そうで、何の不平も言わず与えられたウェ이터としての仕事を黙々とこなしていた。

本作の時代は 1 9 世紀、舞台はアイルランドのダブリンだが、本作を観ていて強く印象に残るのは、ハッキリした階級社会と貧困。そもそも、アイルランドはイギリスからの独立で大変な思いをただけでなく、1 9 世紀半ばに大規模なジャガイモ飢饉が発生したらしい。そのうえ、その時期にはチフスも大流行したそう。本作を観ていると、アルバートもチフスにかかり、危うく命を落としそうになったから大変。もっとも、アルバートは客からもらったチップをしっかりと貯めこんでいるようだから、これなら貧困からの脱出と新たな人生の再スタートも可能かも・・・？

<ええ！この大男も女！>

本作はわりと早い段階で、実はアルバートが女だったという「種明かし」がされる。そのきっかけは、ペンキ職人としてホテルにやってきた男ヒューバート・ペイジ（ジャネット・マクティア）をベイカー夫人から、アルバートの部屋に泊めるように言われたこと。当初はそれを断っていたアルバートだったが、断り切れず仕方なく同じベットで寝ることに。そんな中、ヒューバートが持ち込んだらしい蚤がアルバートの胸元に入り込んできたため、アルバートが服を脱いでいると・・・。

女であることがバレてしまうとウェ이터の職を失うことまぢがいなしだから、アルバートは必死で「このことは誰にも内緒に」と懇願したところ、ヒューバートはあっさりそれを承諾。それはそれで男らしい決断だと思いながら観ていると実はそうではなく、なんとあの長身でハンサムなヒューバートも女であったことが明かされるからこれにもビックリ！さらに、アルバートが驚いたのは、女であるはずのヒューバートはあるところで愛する女性と一緒に生活しているということ。そりゃ一体ナニ？ここまでくると、アルバートのみならず私の頭も大いに混乱することになる。

さらに私が驚いたのは、1 9 世紀のアイルランドの貧困層の一人として生きていながらヒューバートが堂々と自分流の生き方を貫いていること。自分が女であることを世間に隠さなければならないのは仕方ないが、それ以外でのヒューバートの生き方は実に堂々としたものだ。そんなヒューバートの生き方に触れる中でアルバートも次第に自信が芽生え始め、自分も好きな女性に「告白」をして結婚し、貯めていたお金を元手に夢だった小さなお店を持つという計画を進めようとしたが、さてその道のりは・・・？

<この可愛い女性だけは普通だが・・・>

日本の宝塚歌劇では「男装の麗人」に見慣れているが、本作では冒頭から主演女優賞にノミネートされたグレン・クローズがウェ이터として甲斐甲斐しく働く姿や、助演女優賞にノミネートされたジャネット・マクティアが大男のペンキ職人として堂々と働く姿が登場するので、どこか頭がヘンになってくる。そんな中で少しホツとするのが、モリソンズホテルでメイドとして働いている可愛い女性ヘレン・ドウズ（ミア・ワシコウスカ）の存在だ。本作でこのヘレンの存在感が増してくるのは、ヒューバートの男らしい生きざま（？）に刺激を受けたアルバートが、まるで初老の男にめぐってきた初恋のようにヘレンに対してアプローチを開始し始めるためだ。

他方、他のホテルをクビになり、職を求めているジョー・マキンス（アーロン・ジョンソン）が、たまたまモリソンズホテルでボイラーの修理に成功したところから、ホテルに雇われることになったため、このジョーがヘレンに急接近。ヘレンにしてみれば初老の男アルバートよりも若くてハンサムなジョーの方がいいに決まっている。そのうえ、ジョーはヘレンと同じ貧困層出身ながら、そこから脱出意欲に燃え、一緒に自由の国アメリカに渡ろうという夢を語ったから、ヘレンはこれにイチコロ。しかし、若さの暴走（？）の中でヘレンのお腹の中に赤ちゃんができたことを知らされると・・・。

本作に登場する魅力的な女性はこのヘレンだけだし、このヘレンだけは普通の女性だが、あの時代、あの国、あの貧困層出身では、若い普通の女性はどうやってらまともに生きていけるの？

<アルバートとヒューバートは、試練をいかに・・・？>

本作におけるアルバートとヒューバートにはダブリン全域を襲ったチフスという大きな危機が訪れてくる。アルバートはチフスに罹患しながら九死に一生を得たが、ヒューバートの方は最愛の妻を亡くしてしまったため、一時はもぬけの殻状態に。そこで見せたアルバートの提案はかなり思い切った決断だったが、さてそれに対するヒューバートの反応は？

他方、アルバートに訪れるもう一つの危機は、ヘレンを巡るもの。ヘレンの妊娠を知ったジョーは「それでも一緒にアメリカに行く」と明言していたが、さてその腹のウチは？その言葉にまったく信用性がないことは、アルバートをはじめとするホテルの従業員はもちろんヘレン自身がよくわかっていたから、一番途方に暮れたのはヘレン。そんなヘレンに対して、アルバートは寛大な心であくまで優しく接したが、果たして若いヘレンはそれをどこまで理解？ヒューバートの方は、ベイカー夫人からホテル全室の塗装の注文が舞い込むなど、仕事面における充実があったため、愛妻を失った心の痛手から立ち直ることができたようだが、さてアルバートの方は？

<なるほど、このタイトルがピッタリ！>

小説に「起承転結」がなければならぬのと同じように、人生にも「起承転結」がなければ何のためにこの世に生まれてきたのかわからない。私はそう思っているが、本作のアルバートを見ていると、その若い頃は知らないが、きっと今と同じような貧困の中で、一人じっと我慢して生きてきたことは確実。ホテル内の従業員の部屋が個室で、曲がりなりにもプライバシーが保たれているのはさすがヨーロッパだが、その部屋の中で毎晩、客からもらったチップを貯めているアルバートの姿を観ているとホントに切なくなってくる。さらに、ヘレンを巡るジョーとのいさかいのなかで訪れてくるアルバートの人生の結末は実にあっけないものだ。世の中には、歴史上の人物として後世に名を残す人もいれば、その時機、時機に派手なスキャンダルをふりまく人たちがいる。また逆に、ひっそりと誰にも注目されずに生まれ、死んでいく人たちもいるわけだ。

ちなみに、ヒューバートがベイカー夫人から新たに全室塗装という大きな仕事の注文をもらったのは、アルバートの死後しばらくしてから。チフス騒動によって一時は倒産の危機にあったモリソンズホテルがここまで立ち直り、ちょっとまとまったお金が入ったのは一体なぜ？来る 1 2 月 1 6 日の衆議院議員総選挙投票日を前にして政治的テーマに敏感になっている今、一方では本作のような理不尽な結末がまかり通っていることに大きな怒りを覚えるとともに、他方で感じるのは、本作には『アルバート氏の人生』というタイトルがいかにピッタリなことだ。

ヘレンは生まれた子供を抱えながら、何とかモリソンズホテルでの仕事にありつけたようだが、その労働条件の劣悪さは、日本維新の会が新たに問題提起した「最低賃金制の見直し」という論点からは遠く離れたもの。そんなヘレンに対してヒューバートがやさしく声をかける本作のラストシーンが何を暗示するのかは人それぞれの解釈だが、『アルバート氏の人生』とは一体何だったのだろうか？本作鑑賞後の帰路では、それをしっかり追求してほしいものだ。